

物事を多面的・多角的に考える道徳科の授業デザイン

加藤 有貴・上原 秀一

宇都宮大学共同教育学部教育実践紀要 第10号 別刷

2023年8月31日

物事を多面的・多角的に考える道徳科の授業デザイン[†]

加藤 有貴*・上原 秀一**

日光市立落合東小学校*

宇都宮大学共同教育学部**

平成27年に「小学校学習指導要領」が一部改正され、道徳が教科化された。「小学校学習指導要領 第3章 特別の教科 道徳」の「第1 目標」には、「よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。」とある。今回、新たに「道徳科の目標」に入ったのが、「物事を多面的・多角的に考え」という言葉である。本稿は、「物事を多面的・多角的に考え」る道徳科の授業デザインを試みたものである。

キーワード：道徳科、道徳教育、多面的・多角的、「ぶらんこ」

1. 教材「ぶらんこ」について

本研究の教材は、「ぶらんこ」(『どうとく2 きみがいちばんひかるとき』光村図書、2018)を使用した。教材のあらすじを、出来るだけ原文の語を使って示せば、次のとおりである。

「山のおくの林の中で、子どものおさるさん、うさぎさん、りすさんが、みんなでこしらえた小さなぶらんこにのって、「あそんでい」た。そこに「くまさんが、」とんできて、いきなり、ぶらんこに手をかけた。しかし、「あんまり強くふったので、」つなが切れて、くまさんは、「地べたにおっこち」た。「くまさんは、大きななみだをぼろぼろこぼしてないてい」た。そして、「『ごめんよ、ごめんよ。』とあやま」った。「おさるさんは、こまった顔をして、しばらく考えてい」たが、「『もっとじょうぶなぶらんこを作ろう。』と言」った。そして、4匹は「じょうぶなふじづるを、谷間へとりに行」った。

2. 物事を多面的・多角的に考えるための工夫

①関連する内容項目

道徳科の授業では、1時間の授業で扱う「内容項目」は、一つであるのが一般的である。そして、児童の思考が「ねらい」から外れないように授業を行うことが多い。しかし、『小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編』(24ページ)には、「具体的な状況で道徳的行為がなされる場合、「第2 内容」に示されている一つの内容項目だけが単独に作用するということはほとんどない。そこでは、ある内容項目を中心として、幾つかの内容項目が関連し合っている。」と書かれている。つまり、一つの「内容項目」のみに焦点を当てて授業をすることは、実際の生活場面からかけ離れているのである。実際の生活場面で「道徳的行為がなされる場合」には、「幾つかの内容項目が関連し合っている」のである。

そこで、学習指導案の「ねらい」に【関連する内容項目】として、12の「内容項目」の見出しを書いた。

②予想される児童の反応

児童には、物事を多面的・多角的に考えさせたい。教材も多面的・多角的に読ませたい。しかし、ある程度と同じ条件や状況の下で考えなければ、考えを比べたり、深めたりすることができないのではないか。そこで、児童には、教材に書かれている事実は書かれているとおりに読ませたい。教材に書かれて

[†] Yuki KATO*, Shuichi UEHARA**: Multifaceted Thinking in Moral Education Classtime
Keywords: Moral Education Classtime, Multifaceted Thinking

* Ochiaihigashi Elementary School, Nikko

** Cooperative Faculty of Education, Utsunomiya University

(連絡先:suehara@cc.utsunomiya-u.ac.jp 上原秀一)

いないために分からないことは、書かれている事実をもとに想像させたい。そのために、予想される児童の反応を、次の3つに分けて学習指導案に書いた。

・教材に書かれている事実

●教材から明らかな事実

○教材から想定しうる事実

また、児童に、より正確に教材を読ませるために、教材に書かれている言葉にかぎ括弧（「」）を付けた。

【指導案抜粋】

どんなぶらんこですか。

- ・「山のおくの林の中」にある。
- ・「小さなぶらんこ」
- ・「うさぎさん」、「りすさん」は乗れる。
- ・「おさるさん、うさぎさん、りすさんが、みんなでこしらえた」
- ・「おさるさん」、「うさぎさん」、「りすさん」は「子ども」である。
- ・「くまさん」が「強くふった」ら「つなが切れ」た。
- 「おさるさん」は乗れる。
- 「くまさん」にとって、「つな」が細い。
- 「くまさん」は一緒に作っていない。
- わざと「くまさん」が乗れない「ぶらんこ」を作った。
- 大人は手伝っていない。
- 3匹だけで遊ぼうとして作った。
- 3匹のお気に入りの遊具。

このように分けて書くことで、教師も教材に書かれている事実を正確に読むことができる。児童に言わせたい反応ではなく、物事を多面的・多角的に考えた反応を予想できる。そう考えた。

③教材の内容に興味や関心をもたせる導入

道徳の授業で広く行われているのは、「本時の主題に関わる問題意識をもたせる導入」である。しかし、このような「導入」を行うことで、児童の思考が「本時の主題」に固定されてしまうのではないか。つまり、一つの「内容項目」のみを一時間を通して考えるようになってしまうのではないか。そこで、「教材の内容に興味や関心をもたせる導入」を設定した。教材には「ぶらんこ」が出てくる。この「ぶらんこ」は強度が不十分である。それが問題の原因の一つである。「導入」で〈安全なぶらんこの条件〉について話し合う。そうすることで、教材の「ぶらんこ」の強度に着目させることができるのではないか。そう考えた。

④めあて

「ねらい」と「めあて」を比べると、「ねらい」は学習指導案に書くものである。つまり、「ねらい」

は授業者と参観者に示すものである。それに対して「めあて」は、子供に示すものである。そして「めあて」は、どの教科でも示すことが一般的である。児童が見通しをもって授業に取り組めるようにするためである。しかし、道徳科の授業でも児童が見通しをもつことは必要なのだろうか。授業のゴールが見えてしまったら、考える必要性を感じなくなるのではないか。教師の意図に沿った思考になってしまうのではないか。そこで、「めあて」は児童に伝えず、黒板にも書かなかった。

⑤問題解決的な学習

教材「ぶらんこ」では、問題が起き、登場人物が解決策を考え、問題が解決するまでが書かれている。今回の授業では、「問題解決的な学習」を設定した。児童が教材にある問題を発見し、解決策を考えるのである。しかし、教材を最後まで読んでから考えさせたら、児童は物事を多面的・多角的に考えることができないのではないか。〈教科書は正しいこと、正解が書いてある〉という意識が児童の中にはある。そのため、教材の解決策を示してしまったら、答えは一つに決まってしまう。多面的・多角的な考えは出なくなってしまう。そう考えた。そこで、教材の結末（解決策）は示さないことにした。児童の手に置く教材も、結末を伏せたものにした。

『小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編』（84ページ）には、「道徳科における問題解決的な学習とは、ねらいとする道徳的諸価値について自己を見つめ、これからの生き方に生かしていくことを見通しながら、実現するための問題を見付け、どうしてそのような問題が生まれたのかを調べたり、他者の感じ方や考え方を確かめたりと物事を多面的・多角的に考えながら課題解決に向けて話し合うことである。」と書かれている。「問題解決的な学習」は、児童自らが「問題を見付け」るため、児童主体の学習である。そして、「物事を多面的・多角的に考えながら課題解決に向けて話し合う」ことのできる学習である。

今回の授業実践でも、児童に問題を見付けさせた。しかし、問題を全体で確認することはしなかった。教材にある問題は一つではないからである。児童が何を問題と捉えるかはそれぞれ異なる。多面的・多角的な視点から問題を発見し、解決策を考えさせたかった。そこで、問題を全体で確認することはしなかった。

3. 授業実践

令和4年11月16日に日光市立落合東小学校2年生19名で授業実践をした。

(1) 指導案概要

ねらい：ぶらんこ、くまという物事を多面的・多角的に考えることをとおして、[友情・信頼]と他価値との関連性を理解し、気持ちを伝え合い、友達と仲よくしようとする実践意欲と態度を育てる。

【関連する内容項目】

- ・善悪の判断、自律、自由と責任 ・正直、誠実
- ・節度、節制 ・個性の伸長
- ・希望と勇氣、努力と強い意志
- ・親切、思いやり ・感謝 ・礼儀 ・規則の尊重
- ・公正、公平、社会正義 ・勤労、公共の精神
- (・相互理解、寛容)

学習活動：

1. 安全なぶらんこの条件について話し合う。
2. 教材を読んで話し合う。

発問1：どんなぶらんこですか。

発問2：どことなくまさんですか。

発問3：くまさんは、何がしたかったのでしょうか。
おさるさんは、どうすればよいでしょう。

・ペアで話し合う。

・役割演技をする。

(児童：くま、さる 教師：うさぎ、りす)

3. 授業の振り返りを書く。

(2) 授業考察

①関連する内容項目

9グループ(19名)の2年生が書いたワークシートから、[友情、信頼]とどの「内容項目」を関連付けたのかを調べた。その結果、私たちが想定した12の【関連する内容項目】のうち、いずれかの児童が11の「内容項目」に関する考えを書いていた。つまり、児童の考えが多面的・多角的であったことが分かった。どの「内容項目」について、何グループが書いていたのかは、次の表のとおりであった。

内容項目	グループの数	内容項目	グループの数
親切、思いやり	7	相互理解、寛容	4
節度、節制	7	礼儀	3
個性の伸長	6	善悪の判断、自律、自由と責任	2
公正、公平、社会正義	6	正直、誠実	2
勤労、公共の精神	5	規則の尊重	1
希望と勇氣、努力と強い意志	4	感謝	0

ワークシートを調べた結果、教材「ぶらんこ」の状況では、[友情、信頼]と[親切、思いやり][公正、公平、社会正義]を関連付けて考える児童が多いことが分かった。また、[規則の尊重]を関連付けて考える児童が少ないことが分かった。また、[感謝]を関連付けて考える児童はいないことが分かった。教師が想定した12の【関連する内容項目】以外の「内容項目」に関する考えは、児童のワークシートに書かれていなかった。

②予想される児童の反応

教師が教材研究をして、「・教材に書かれている事実」「●教材から明らかな事実」「○教材から想定しうる事実」を指導案に書いた。教材に書かれている言葉にかぎ括弧を付けて指導案に書いた。こうすることで、教師が正確に教材を読み、理解することができた。そのため、教材に矛盾する発言を児童がした場合に対応することができた。

③教材の内容に興味や関心をもたせる導入

導入で〈安全なぶらんこの条件〉について話し合った。児童は、材料、作り方、作り手、場所の視点から、多面的・多角的に考えていた。「教材の内容に興味や関心をもたせる導入」は効果的であった。「本時の主題に関わる問題意識をもたせる導入」をしていたら、〈友情〉〈仲良し〉といった語が出てくる。そうすると、児童の思考が限定される。意図的にそのような語に触れなかったことで、児童の思考が多面的・多角的になった。

④めあて

「めあて」を示さなかったことも効果的であった。特定の「内容項目」を直接的に連想させる「めあて」を示さないことで、児童が自由な思考をすることができた。結果、児童が多面的・多角的に考えることができた。

⑤問題解決的な学習

教材の結末を児童に伝えなかったことで、児童は多面的・多角的に問題を発見し、解決策を考えていた。教材の結末を伝えていたら、多面的・多角的な考えは出なかったであろう。

発問1、発問2で考えた中から、自分にとって問題と考える物事を見つけさせた。意図的に問題の一つに決めずにグループで解決策を考えさせた。これにより、多面的・多角的に問題を見つけ、解決策を考えることができた。そして、見つけた問題、考えた解決策を役割演技で発表させた。児童が「くま」

と「さる」を演じた。教師（T1）が「うさぎ」を演じ、問題と解決策を聞き出した。教師（T2）が「りす」を演じ、「くま」役、「さる」役の児童の近くに寄り添い、笑顔で頷いていた。そうしたことで、児童は問題と解決策を発表することができた。人前で話すことを苦手としている児童も、発表することができた。

4. まとめ

「ねらいとする道徳的価値」を定めて授業を行うことは大切である。しかし、研究を進める中で、一つの「道徳的価値」が実現するためには、様々な「道徳的価値」が関わっていることが分かった。教師が「関連する内容項目」を想定して「ねらい」を定め、授業作りをすることが大切である。そのような授業では、児童が物事を多面的・多角的に考えることができる。教師が児童一人一人の考えを大切に扱うことができる。そう考え、児童が物事を多面的・多角的に考えることのできる授業を考え、実践した。その結果、児童は物事を多面的・多角的に考えることができた。教材の中から多面的・多角的に問題を見つけ、解決策を考えていた。「めあて」を示さずに、授業のゴールが見えないからこそ、教師の意図した考えを言うのではなく、自分ごととして考え、発言していた。これは研究の成果である。

今回の研究をとおして気付いたことは、教材研究の大切さである。教師の意図した考えを言わせる〈押し付け道徳〉ではなく、児童が物事を多面的・多角的に考える授業を行うためには、教師が教材に書かれている事実を正しく読まなくてはならない。そして、教材に書かれていないことは多面的・多角的に読まなくてはならない。今回の研究では、予想される児童の反応を「教材に書かれている事実」「教材から明らかな事実」「教材から想定しうる事実」の3つに分けて書いた。「教材に書かれている事実」「教材から明らかな事実」は教材に書かれたとおりに、一面的に読まなくてはならない。そして、「教材から想定しうる事実」は、多面的・多角的に読まなくてはならない。今回の研究では、一面的に読むことと、多面的・多角的に読むことを分けたのである。そして、特定の「道徳的価値」をとおして教材を読むと、「教材から想定しうる事実」を多面的・多角的に読むことができなくなってしまう。つまり、物事を多面的・多角的に考えることができなくなってしまう。

しまう。教師の価値観を〈押し付ける〉授業になってしまう。研究の結果、児童にも教材に書かれていないことを多面的・多角的に考えさせることができた。

しかし、課題も残った。次のとおりである。

- ①価値の関連性の強弱は、他の学級、他の教材、他の学年ではどのように現れるのか。今後も研究が必要である。
- ②〈めあて〉は必要のないものなのか。児童の思考を特定の「内容項目」に縛り付けることのない〈めあて〉ならよいのか。
- ③今回は教師による読み聞かせを行った。しかし、全ての児童が教材の状況を理解できているのだろうか。児童が各々に合った速さで黙読した方が、教材を正確に読むことができるのではないかと書かれていないことを多面的・多角的に読むことができるのではないかと。黙読の可能性について、今後の研究が必要である。
- ④〈補助発問〉は学習指導案に書くべきであった。教師は教材研究をして児童の反応を予想し、〈補助発問〉を準備する必要がある。
- ⑤振り返りを共有しなかった。共有することで、新たな気付きを得られることも考えられる。また、教材で学んだことを心に留めるような「終末」もあるかもしれない。効果的な「終末」について、今後も研究が必要である。

引用・参考文献

- 文部科学省「小学校学習指導要領（平成29年告示）」2017
- 文部科学省『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 特別の教科 道徳編』2017
- 朝倉喩美子他編『どうとく2 きみがいちばんひかるとき』光村図書、2018

2023年3月31日 受理

Multifaceted Thinking in Moral Education Classtime

Yuki KATO, Shuichi UEHARA